

城下町における都市計画と基軸の設定

— 飯田を事例として —

松 井 幸 一

City Planning and Axis in Castle Town

— The Case of Iida Castle Town —

MATSUI Koichi

This article is discussed as a case study for the design of Iida castle town. Iida castle town has been made to imitate the Kyoto. So the Feng Shui philosophy had big influence on the city planning. Especially a Shishin-Souou has big influence on city planning. Iida castle town's main streets are the same inclination as straight line which connects Genbu and Suzaku. Accordingly it can be said Iida castle town aimed at the form of the ideal Feng Shui. And from the design technique of the Iida castle town, Castle landscape composition was confirmed to incorporate the surrounding landscape. Iida castle town's vista is designed for the northern mountain, and vista to the mountain is secured in parallel in major streets in castle town. So Iida castle town design was based on feng shui theory and surrounding landscape.

I. はじめに

城下町は地勢・水利などの自然的条件，街道・水運などの交通条件，その他にも防御機能や商業機能など様々な条件を考慮して形成されている。特に地勢・水利は重要視され，ここでは現実の自然環境が風水理論の四神相応に読み替えられることも多かった。

近年の都市計画・建築学の分野では近世に用いられた風水理論について科学的な視点から検討し，風水理論に基づいた都市を「風水都市」として風水理論がいかに自然環境と都市内部の空間構造と結びついていたのかを考察する事例も存在する¹⁾。そこで本稿では飯田城下町を事例として城下町設計がどのようなおこなわれていたのかを考察していく。

II. 城下町と風水理論

一般に中世の城郭は防御機能が優先され山間部に立地し、近世になると交通・経済機能が考慮されて平野部に移る。本稿ではまず近世に城地がどのように選定されていたのかを確認したい。城地の選定には様々な条件が考慮されるが，そこには風水理論の一つである「四神相応」の考え方も取り入れられていた。荻生徂徠は『鈴録』の中で城地の選定について「選地トハ城地ノ選様ナリ北条流ニ繁昌ノ勝地防戦堅固守城堅固ト云ウアリ繁昌ノ勝地トハ北高ク南低ク南北長ク東西短ク東西南ニ川ニテモ海ニテモアルヲ云ト伝ヘリ謙信流ニハ四神相応ノ地ヲ繁昌ノ勝地トス四神トハ左青龍右白虎前朱雀後玄武ナリ左ニ流水アリ右ニ大道アリ前ニ袴池アリ後ニ山林アルオ四神相応ノ地トス」と四神相応の地勢が重要であると説いている²⁾。

その理由は「是全ク表相バカリノ事ニハ非ズ如此ナル地ハ西北高ク東南低キ故冬暖ニ夏涼ク人気集マリ盛ナル上山林原野田畠流水ヲカカヘタルユヘ物ノ自由モ足ルニヨリテ繁昌ノ勝地ト定メテ大都会ノ城地ハ是ヲ用ベシトナリ合戦ノ時ニモ右ノ如キ地ハ後ト右ト高ク左ト前ト低ク大手ノ方低ク搦手ノ右高キ故順地ナリ」と、四神相応の土地は平時にはすごしやすく人・物ともに集まり，戦時には兵法の上で有効な土地であるためとしている。さらに「謙信流ニハ右ノ如キ地ナキ寸ハ地形ヲ補ヘシト伝エリ山林ナキ寸ハ森林ヲタテ流水ナケレバ川違ヲ仕カケハ田畠ヲ開キ或ハ切拂テ野原ニスル事ナリ」と上記の地勢に合致しない場合には地勢を改変することにまでふれている。

1) 山崎真詠・清水畑貴彦・張翠萍・北原理雄「風水理論を用いた地域空間構成の解説—その1 長野県田15町における基礎的研究—」日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1, 1999, 299-300頁。

2) 謙信流の前後左右については「南ヲ前トシ北ヲ後トシ左ヲ東右ヲ西ニシテ伝タルナリ」との記述がある。荻生徂徠『鈴録』第十五巻。

実際の築城にはこのような四神相応の考え方がいかに適用されていたのか。築城に関する記録は多くはないが、『金城温古録』には名古屋城の詳細な築城記録が残っている。それによれば「……此慶長御新城乾の方、旧山相ひかへて、戌亥闕の土地なれば、是を熊と築場られて旧山の不足を補はれしものなり。偕また、地平高低を量り考るところ、先づの三之丸は東程地高く西程低し。その大抵、本町大手辺を中央と為し、是より登りて二ノ丸は大凡そ三尺高かるべし。此の三之丸は旧山の元地なり、……偕、二ノ丸より登りて御本丸は大凡そ三尺五寸程高し、これは全く築物の地高なりと見ゆる、……」とある³⁾。つまり、築城にあたって旧山の戌亥（北西）の方角が欠けた土地であったので地形を補い、さらに本丸部分は他より高くなるように地形を補っている。これは上記『鈴録』中にある「右ノ如キ地ナキ寸ハ地形ヲ補ヘシ」を実践した事例といえる。さらに『金城温古録』では「……四神相応の要地の城とは、これを申奉るなるべし」とあり、築城において四神相応の考え方が意識されていたことを示している。

詳細な文書記録が多くないこともあり、各地域の城地の選定にあたってどのような理念があつて何が最も重用視されていたのかを明示することは難しいが、少なくとも風水理論の一つである四神相応の考え方が城地選定の一つの要因として考慮されていたことは名古屋城の例からも示唆される。

Ⅲ. 飯田城下町の形成理念

(1) 飯田城下町の整備

城下町の形成にあたっては様々な設計上の理念が考慮される。例えば山城なのか平城なのか、城下町を豎町とするのか横町とするのか、あるいは城郭に対するヴィスタ（見通し）はどうするのか、その設計理念は建設された時代によって多種多様である。一般に戦国期城下町の形成は、守護町からの移行と中世城館集落からの発展の2系列がある⁴⁾。初期の飯田城郭は現在の飯田城跡ではなく、愛宕神社周辺に建てられた愛宕城（飯坂城）であった。この地に城郭を築いた坂西氏は鎌倉時代に地頭として赴任しているため、飯田は中世城館集落からの発展系列といえる。その後、室町時代に現在の飯田城跡に飯田城が建設された。坂西氏は天文23（1554）年に下伊那に侵攻した武田氏に降伏し、飯田には下伊那郡代が置かれた。飯田はこの時期に拠点にふさわしい本格的な整備がなされたと考えられている⁵⁾。その後、織田家、徳川家、豊臣家と

3) 名古屋市教育委員会編『名古屋叢書続編第十三巻 金城温古録（一）』名古屋市教育委員会、1965、40頁。

4) 矢守一彦『城下町のかたち』筑摩書房、1988、3頁。

5) 飯田市美術館編『飯田城ガイドブック—飯田城とその城下町をさぐる—』飯田市美術館、2005、18-19頁。

領主が移り変わり、豊臣配下の時代には毛利秀頼・京極高知が飯田を治めた。この時代の飯田領は上伊那・下伊那を含めて10万石を越える所領があり、飯田城は規模を拡大し城下町の整備も進んだ。とくに京極時代には光増右衛門を奉行として都市計画と整備がおこなわれたといわれる⁶⁾。

光増右衛門は京都の儒学者で、城下町の都市計画は「京都に倣いて之を正す」と伝わる⁷⁾。そのため飯田の城下町は小京都とも呼ばれ、その街路も京都と同じく碁盤目状である。京の都の形成理念として有名なのは風水理論の四神相応が用いられている点である。一般に船岡山を「玄武」、小字「横大路朱雀」を「朱雀」、鴨川を「青龍」、木嶋大路を「白虎」になぞらえているといわれる⁸⁾。

この他にも平安京の四神相応説には諸説あるが、風水的見地が用いられていたことは一致する。したがって、京の都にならって計画された飯田城下町の設計にも京の都と同様に風水理論が用いられているといわれる。

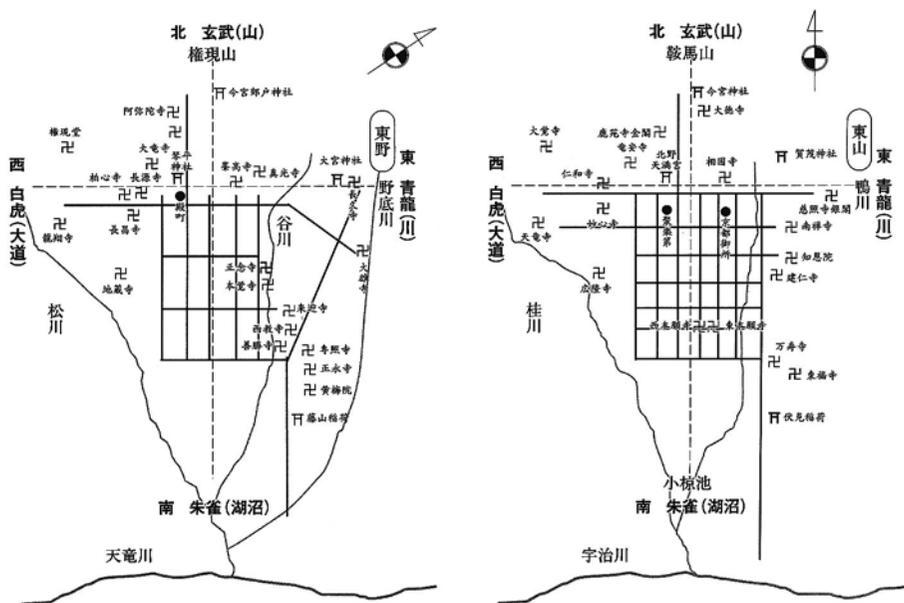


図1 飯田と京都の四神相応概念図
飯田市美術館 2005, 131頁より引用。

6) 前掲5) 20頁。

7) その後も小笠原時代、堀坂時代、堀時代と飯田城主は儒学者を抱えていた。

8) 足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社、1994、28-29頁。

(2) 飯田の四神相応

実際に飯田の四神はどこになぞらえられているのか。これについても京都の四神相応と同じく様々な見解が存在する。図1は飯田市美術館編集のガイドブックに記載された飯田と京都の四神相応概念図である。ここでは玄武を権現山、青龍を野底川、朱雀を南方の湖沼、白虎を西方の大道としている。一方、これとは異なる地勢を四神になぞらえる事例もある。清水畑らによるグループは長野県旧15町の「風水空間」調査の一環として飯田町で四神相応の比定をおこない⁹⁾、飯田城下町の四神は町の北西の風越山（権現山）を玄武、町の北から北東の座光寺へ続く山々を青龍、町の南西の水晶山へ連なる山々を白虎、松川と野底川の合流する地域を朱雀と比定した。さらに町の中心部の北西にある白山神社を気の集まる「穴」、松川と野底川に挟まれた地域を「穴」の全面にあたる「明堂」としている。風水的特徴としては「玄武、青龍、白虎はほぼ横並びであるが、明堂の左右は緩く隆起している。左右を川に挟まれたまとまりのある背山面水型の得水局である。」とする。

清水畑グループによる四神の比定を地形図上に示したのが図2である。両者の比定では権現山（風越山）を玄武、南部の松川と野底川が合流する地域を朱雀とする点は同じであるが、青龍と白虎に関してはそれぞれ比定する地域が異なる。今村説が野底川を青龍とするのに対して清水畑グループは座光寺へ続く山々を青龍とし、白虎についても今村説が大道であるのに対して清水畑らは水晶山へ連なる山々を白虎とし、それぞれ比定する地勢が川と山、道と山と大きく異なる。

そもそも風水理論の四神はどのような地勢になぞらえるのが適当なのか。鈴木之言を借りれば「日本の空間構成を風水との関連で論じる場合、ほとんどが「四神相応」と関連づけられる。特に、平城京・平安京など古代の都城への言及では顕著であるが、そこでは「青龍＝河川、朱雀＝湖沼、白虎＝大道、玄武＝山丘」という組合せは自明なものだと理解されている。」さらに、鈴木は足利が平安京の四神を再定義した際に白虎を一般に比定される山陰道ではなく、平安京西郊に発掘された木嶋大路に比定したことなどから「自明の四神相応」は「学問的な保証」に裏付けされていることを指摘している¹⁰⁾。しかし、日本の文献で確認できる初の四神相応についての記述は『昨庭記』であるが、それはあくまで作庭に関するものであることから「自明の四神相応」は居宅の法として成立したもので都城・都市の方法でなかったこともまた指摘している。

9) 清水畑貴彦・山崎真詠・張翠萍・北原理雄「風水理論を用いた地域空間構成の解読—その2 旧長野、松代、松本、飯田4町を例に一」日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1, 1999, 301-302頁。

10) 鈴木一馨「日本古代・中世期の風水術における四神相応について」宗教研究82(4), 2009, 383-384頁。



図2 飯田の四神相応
飯田・時又 25000分の1地形図を基図として作成。

風水理論の歴史を確認すると「風水」は中国では太古からの景観判断法であったが、その語が中国独特の環境認識として定義づけられたのは『葬経』からである。それ以前には「相地」「相宅」「地理」「堪輿」「青烏」「陰陽」などの語が風水説の前身理論として用いられ同義語であった¹¹⁾。『葬経』での「四神相応」は居宅周辺の自然環境を比定したもので、当初の「四神相応」の概念は居宅に用いていた。その後、10～11世紀の風水書に四神と地形の関係が初見され、都城造営期の「四神相応」はこの古法を用いたと推測されている¹²⁾。この風水書では青龍・白虎・玄武は山丘、朱雀は山丘あるいは水とされ、「自明の四神相応」とは異なる比定になっている。

したがって、清水畑グループが飯田町で青龍、白虎をそれぞれ山と比定したのは今日いわれる一般的な「自明の四神相応」の比定とは異なるが、四神相応の古法からみればありえる見解といえる。また、再度『金城温古録』を引用すると「名府御城の如きは、道を四道に開かれて、四方より人民輻湊する事、恰も天下の城の如く、十里に嶮地を置き、東は山、南は海、西北は木曾川あり、その中間、三五里を隔て要害を設けしめ給ふ。……城・陽・郭の三を備へ、四神相応の城とは、これを申奉るなるべし。」とあり、名古屋城の四神の比定も「自明の四神相応」とは異なる。つまり、都城の四神相応は「自明の四神相応」とは異なる事例も存在し、この点は比定をおこなう際に留意する必要があるだろう。

足利の比定を踏まえれば、京都の平安京では玄武の船岡山と朱雀の横大路朱雀を結ぶ線上に朱雀大路が通り、都市計画の理念として風水理論が適用されていたといえる。飯田の城下町が京都を模したとするならば、飯田でも玄武と朱雀を結ぶ線が基軸とされたと考えられる。そこで、まず飯田城下町の玄武と朱雀の設定条件を確認したい。

飯田の四神は比定する場所に諸説あるが、玄武と朱雀については風越山と城郭南側の河川合流地帯がそれぞれ比定され見解が一致する。風越山は標高1535.1m、山頂には白山権現を祀り、権現山とも呼ばれる。風越山は風の吹きこす峰で古くは「風越の峰」と称し、歌枕として和歌にも詠まれている。山には国の重要文化財に指定されている白山社奥宮や登山道に点在する観音菩薩の石仏群、比丘尼、役小角の石像などがあり古くから信仰の山として栄えてきた¹³⁾。白山権現は山岳信仰と修験道が混合したものである。そのため、古くから飯田一帯では風越山を特別な信仰対象の山として、あるいは景観面において周囲に比べて一段と高い山として特別視してきた(図3)。このような住民の風越山に対する古くからの文化的・自然的認識が根底にあったために、城下町の設計においてはこの山を玄武に設定したと考えられる。

11) 渡邊欣雄『風水の社会人類学 中国とその周辺比較』風響社、2001、37-43頁。

12) 前掲11) 384頁。

13) 風越山を愛する会編「風越山イラストマップ」風越山を愛する会、2005。

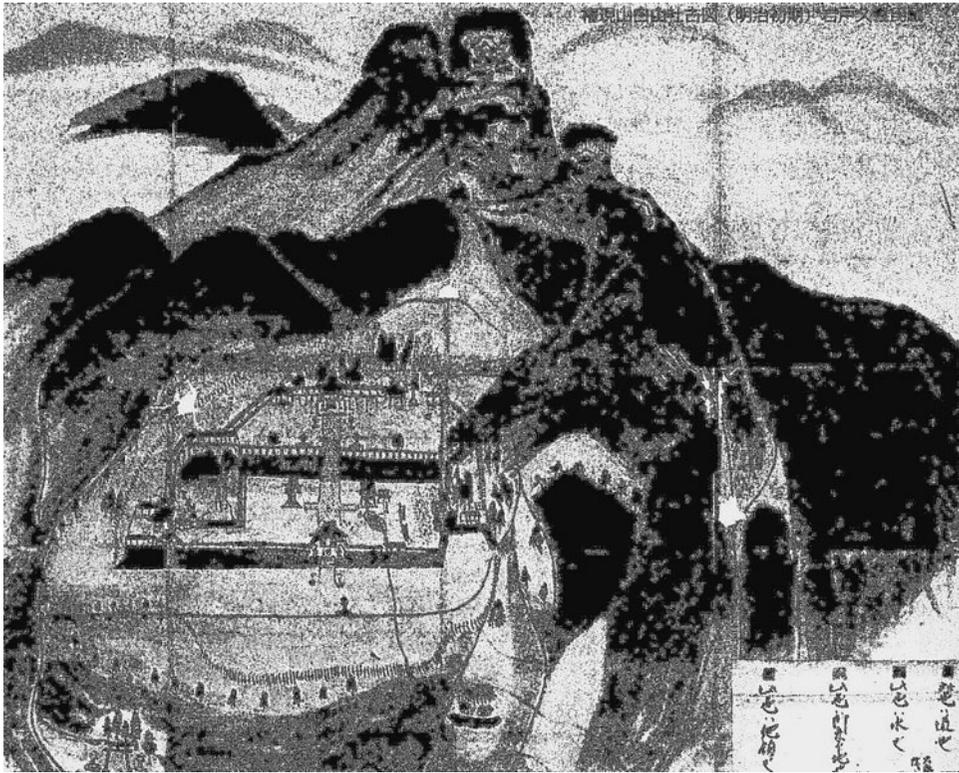


図3 近代期に描かれた風越山
風越山を愛する会 2005より引用。

朱雀にあたる河川合流地帯は城下町西側を流れる松川と東部を流れる野底川の合流地点で、城郭のある台地上からは70mほど低い(図4)。河川と合流地帯の位置を17世紀初頭の飯田城絵図と現在の地形図で比較すると河川の補修や堤防の設置によって河川はやや直線的になっているが流路の大幅な変更はない。



図4 松川と野底川の合流地点

清水畑グループの指摘する飯田の「背山面水型の得水局」は背山が風越山、面水が松川と野底川の合流地帯である。そもそも

このような地形が風水的観点から好まれるのは「山を以て水を得る」との考え方から都城の用水を山からの水に頼っているためである¹⁴⁾。

城下町河川の最も大きな役割は用水である。飯田城下町がまだ小規模であった頃の用水は風越山の溪谷から湧いて出る松洞、押ぼら、滝の沢、アミダ沢、エンゴ沢などの水が使われていた。しかし、城下町の発展と上飯田の多くが水田地帯になるにつれて水が不足し、松川や野底川が御用水ならびに灌漑用水として活用されるようになった¹⁵⁾。用水以外の重要な機能としては防衛機能が挙げられ、2つの河川に囲まれるように城下町が位置していることから飯田城下町の防衛機能は高い。さらに防衛機能からみれば飯田の城下町は城郭の置かれた台地と南側の高低差が大きいことが特徴である。図5は国土地理院が提供する基盤地図情報の10mメッシュ標高から作成した飯田市街地周辺の等高線図で、図上では等高線の間隔を10mに設定している。この図で確認すると城下町は西から東にかけて徐々に低くなり、飯田城址から南部にかけては崖状になっている。したがって、飯田城は2つの河川と南側の崖によって天然の要害であったといえる。以上、玄武と朱雀の設定条件をみてきたが、飯田城下町の玄武と朱雀の設定を地形条件も含めて考えれば、玄武は古くからの文化的・自然的な住民認識のもとに設定され、朱雀は城下町の水利と防衛機能をも考えて設定されたとみることができる。

次に玄武と朱雀を結んだ基軸について考えたい。足利による比定を踏まえれば、京の都の都市計画は玄武である船岡山と朱雀である小字横大路朱雀を結んだ直線上に朱雀大路が設定され、これが都市計画の上で重要な基軸となっている。一方、飯田城下町も玄武と朱雀が設定されていることから同様に都市計画上の基軸となっていたと考えられる。そこで、その確認のために朱雀と玄武を結んだ直線と城下町街路の角度を比較してみたい。まず、玄武を風越山の山頂にある白山社奥宮、朱雀を松川と野底川の合流地点として、2つの地点を結んだ地点を25000分の1の地形図上で計測すると2点間の直線は西に約65度傾く。次に近世飯田城下町の基軸となる大手町街路の角度を計測するとこちらも西に約60度傾いていた。

飯田城下町は幾度かの大火によってほぼ全域が消失し京都に比べれば発掘調査も少ないが、町割からみれば近世の堅町型プランを踏襲し再整備されている。それは裏界線と呼ばれる防火帯が近世町屋の地尻線をほぼ踏襲し整備され、地尻線がずれる箇所は裏界線がずれることから確認できる(図6・図7)。したがって、現在の町割は近世町割の多くを踏襲し、本稿で計測した大手町通りの角度は近世城下町の軸線となる角度であるといえる。25000分の1地形図上

14) 石橋青編『風水図文百科』陝西師範大学出版、107頁。

15) 小林郊人「松川」飯田市立図書館所蔵新聞切り抜き。



図5 飯田の等高線図

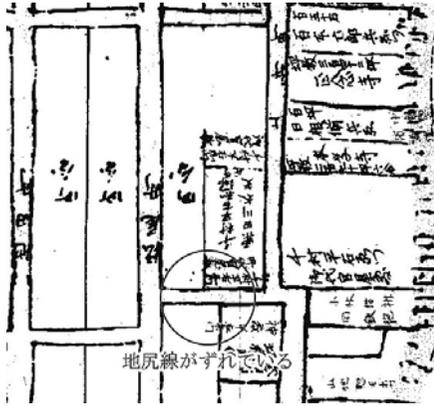


図6 近世町屋の地尻



図7 裏界線

飯田市美術博物館 2005「飯田城絵図」より引用。

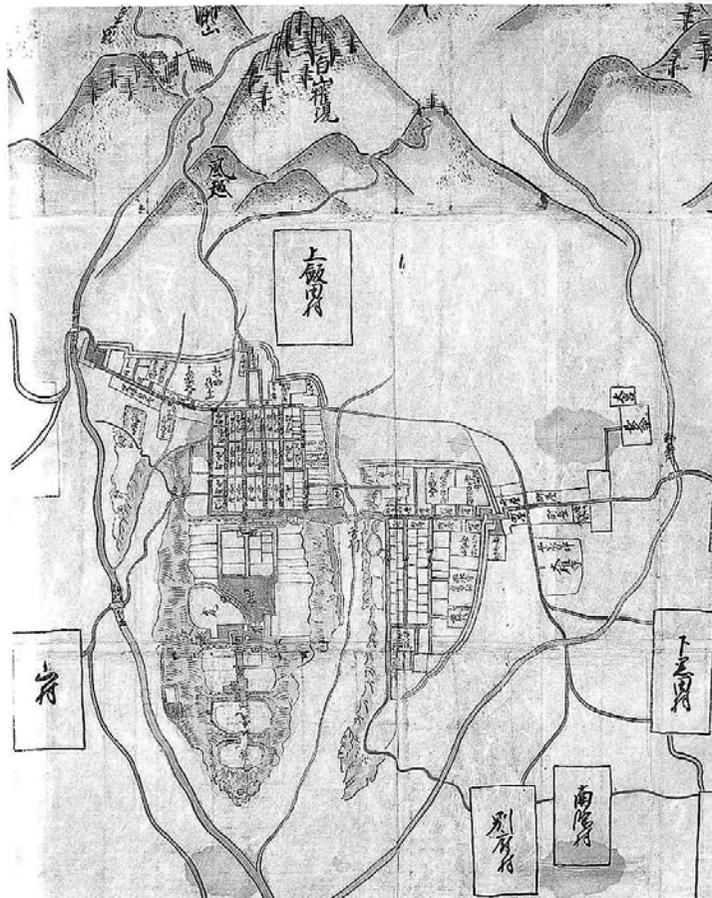


図8 飯田領図(部分図)

飯田市美術博物館 2005, 付図「飯田領図」より引用。

の計測によるので正確とは言い難い点もあるが、玄武と朱雀を結んだ直線と大手町街路の角度は両軸ともに西に約60度程度傾く点は一致していることから、都市計画の上で玄武と朱雀を結んだ直線が基軸として機能していたといえるだろう。

それでは、実際に玄武と朱雀を結ぶ基軸はどのように認識されていたのか。図8は飯田城下町の周辺まで含んで描かれた「飯田領図」である。図は北西を上として、中心に飯田城下町を描きつつ周辺の村々と街道を描いている。この図には玄武である風越山と朱雀である松川と野底川の合流地点、さらに城下町内の街路も描かれる。図の玄武と朱雀を結ぶ直線はほぼ南北に一直線上に描かれ、それに沿うように街路も描かれている。したがって玄武と朱雀を結ぶ基軸が近世の城下町設計の際に中心として意識されていたと考えられる。

IV. 城下町における環境構成と景観軸

飯田城下町には風水理論を意識したと考えられる基軸の設定が確認できた。しかし、城下町の設計は風水理論のみを基盤とするものではない。飯田城下町も実際の設計の際には街道の位置や土地の高低など、城下町の拡張性や生活環境の利便性なども含めて設計されていると考えられる。つづいてその一つの要素である自然環境とその景観構成に着目して城下町を考えてみたい。

城下町の環境構成については建築学の分野で多くの蓄積があり絵図による城下町の環境認識の考察¹⁶⁾、デザイン手法の解明¹⁷⁾などがおこなわれている。絵図による城下町の環境認識の考察からは、地形図で鋭角・鈍角に交差する街路を絵図では直行座標に置き換えて描く傾向があるとともに、平地に立地する都市では実地の上でも直行軸上に街路が形成される都市が多いことが指摘される。また、絵図上の方位にかんしては必ずしも北を上として描かず城郭を正対させて上とする絵図が多いこと、正確に東西南北を向いていない街道が絵図の横手方向に平行に描かれるのに対して方位は絵図の垂直平行方向に描かれるため実際の方位とずれをもつ絵図が多いことが指摘される。さらに絵図の描画手法として城下町内が平面的に描かれるのに対して周囲の山々は立体的に描かれることも絵図の特徴として挙げられている。このような絵図の描か

16) 笠真希・野中勝利・佐藤滋「小城下町都市における環境構成に関する研究：その1 絵図による近世城下町における環境認識についての考察」日本建築学会大会学術講演梗概集、F-1、1995、711-712頁。

17) ①笠真希・武田光史・佐藤滋「小城下町における環境構成に関する研究：その2 小城下町のデザイン手法の解読方法」日本建築学会大会学術講演梗概集、F-1、1996、735-736頁。②武田光史・笠真希・佐藤滋「小城下町における環境構成に関する研究：その3 24小城下町のデザイン手法」日本建築学会大会学術講演梗概集、F-1、1996、737-738頁。

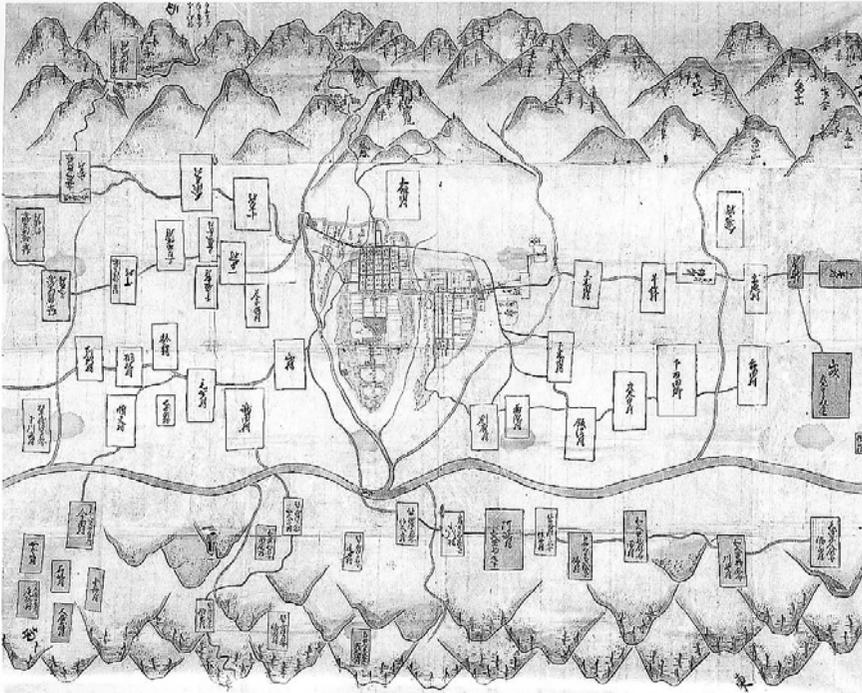


図9 飯田領図(全図)

飯田市美術博物館 2005, 付図「飯田領図」より引用。

れ方からは城下町の完結性が推察され、山を上部に描く点、街道によって方位が調整される点から、山または街道による方位間の規定などの空間構成の把握があったと推察されている。さらに絵図に城下町計画の理念が現れているとすれば、設計理念より上位に自然環境が存在し、自然環境を城下町計画に適用させていたという解釈もなされている。

そこでまずは飯田城下町でも描かれた絵図から近世の人々の景観認識を考えてみたい。考察の対象とする絵図としては近世の城下町内部まで描いた「飯田領図」と「飯田城絵図」が最適である(図9・図10)。絵図の構図は両絵図ともに城郭を中心に正対して描き上を西としている。城下町の外部まで街道が確認できるのは「飯田領図」だけであるが、先行研究でも同様の指摘があるように周縁部の街道は横手方向に平行に描かれており極めて模式的である。城下町周囲の山々は立体的に描かれるとともに白山権現については特に山腹に名称も記している。「飯田領図」では城下町とその左右の空間は平地のように描かれているのに対して、上下は山々を描いている。これは城下町の完結性と飯田領の完結性、さらには周囲を山に囲まれている中で飯田周辺が比較的平野部であることを強調しているとみることができる。一方、「飯田城絵図」



図10 飯田城絵図

飯田市美術博物館 2005, 付図「飯田城絵図」より引用。

は周囲の地形がほとんど描かれておらず城下町内部に焦点を当てた絵図である。この図で特徴的なのは城下町内部の自然環境を描いている点であろう。野底川の両岸では木々や起伏が描かれ、同様に城下町西部でも松川に合流する小河川とともに起伏が描かれている。野底川を挟んだ城下町東部は橋北地区または北町と呼ばれ伊那街道へと繋がる。この地区の侍屋敷は身分的に下位の者が多く居住し、町屋と寺院も配置され寺町を形成していた(図11)。

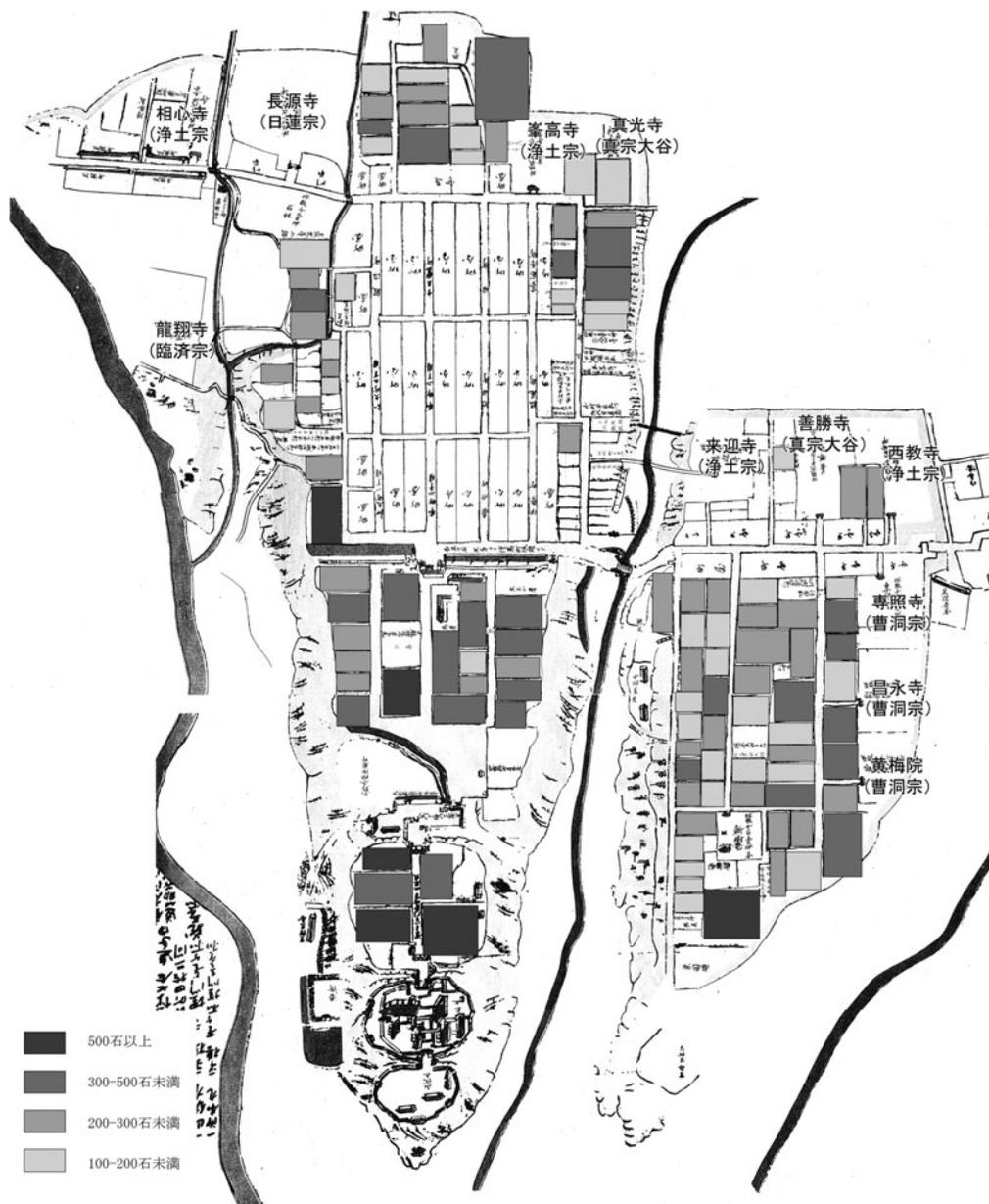


図11 武家屋敷の階層区分と寺院の分布
飯田城下町絵図を基図として作成。

一般に寺町の機能は町の周辺や要地に寺院群を配置して都市の防衛に役立てるといわれるが¹⁸⁾、寺院群の配置には時代的な変遷がみられることから防衛というような一つの要素のみで解釈することはきわめて難しいことも指摘される¹⁹⁾。飯田の寺町を形成する寺院の多くは16世紀から17世紀に移転または建設されたと伝わり、城下町が整備・拡大されていく過程と一致する。図11には城下町内の主要な寺院の配置をも示している。寺町の設計にどのような意図あったかは明確な記録が残っていないため判然としないが、飯田でも他の城下町と同様に外縁部に寺町を配置していること、一部では宗派による意図的な配置が推察されることから何かしらの計画性があったのは間違いない²⁰⁾。待屋敷の階層性と寺院の分布からは、少なくとも橋北地区では野底川を挟んで城下町の都市計画が大幅に異なるような城下町計画を読み取ることができ、城下町の設計にあたって河川を境界として取り込んでいたことが絵図および待屋敷の配置の分析から指摘できる。

城下町の設計には実用的な機能以外にも景観的な構成として特定の目印を対象としたヴィスタ(見通し)が組み込まれ、その対象となるのは天守や特定の自然景観などである²¹⁾。飯田にはすでに天守や城郭など城下町にかかわる建築物はほとんど残っていないが、近世の町割をほぼ踏襲しているため城下町設計にあたってのデザイン手法を現在の地図に復原することによって地図上で考えることは可能である。

すでに城下町周囲の自然環境と景観構造を考察した研究としては、視覚的な景観の構造を「景廊」という概念を用いて明らかにした事例²²⁾や、小城下町のデザイン手法は自然条件に順応する、活用する、景観として取り組むといった共通の計画手法があることを明らかにした事例など²³⁾、主に建築学の分野で多種多様な視点から考察をおこなっている。次にそれらの先行研究を踏まえつつ飯田城下町において景観構造がどのように組み込まれていたのかを考えてみたい。

18) 原田伴彦「近世都市と寺町」(永島福太郎先生退職記念会編『日本歴史の構造と展開』山川出版社, 1983) 243-270頁。

19) 佐々木達夫「百万石の城下町—江戸時代の寺町と寺院の形成—」金大考古64, 2009, 1-3頁。

20) 寺町の形成および寺社の配置にかんする意図については、京都の朱雀大路の延長上に今宮神社があるのに対して飯田でも玄武と朱雀の延長上に今宮郊戸神社があること、全体的にみれば寺院の配置が京都に似ていることから、京都を模した配置であるとの解釈もなされている。前掲5) 130-131頁。

21) 宮本雅明「近世初期城下町のヴィスタに基づく都市設計—その実態と意味」建築史学4, 1985, 69-91頁。

22) 趙城崎・佐藤滋「景廊による都市の景観構造の記述に関する研究—山あて景観を特徴とした近世城下町を基盤とした都市を対象として—」日本建築学会計画系論文集73, 2008, 2165-2172頁。

23) 武田光史・笠真希・佐藤滋「小城下町における環境構成に関する研究—24小城下町のデザイン手法の構成—」日本建築学会学術講演梗概集, F-1, 1996, 737-738頁。

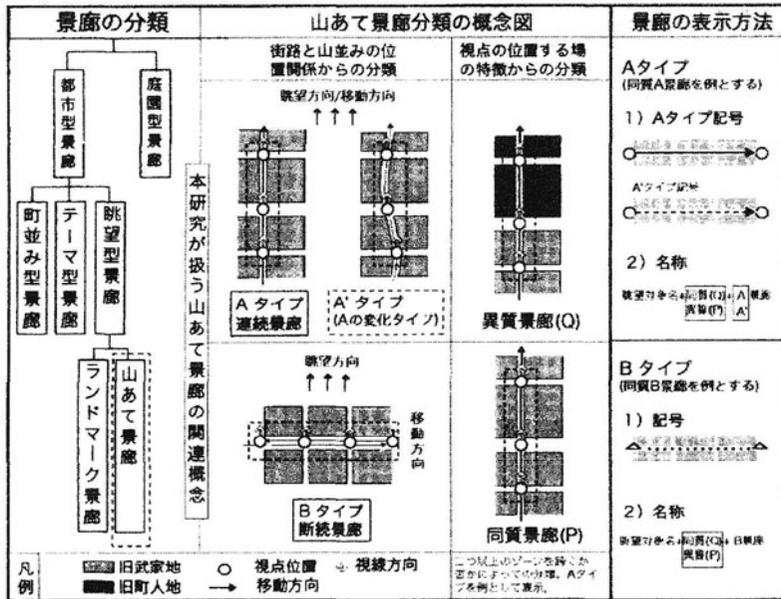


図12 景観の定義分類
趙・佐藤 2008より引用。

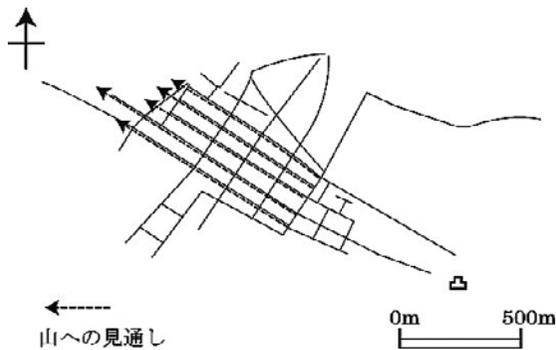


図13 飯田の都市骨格と山への見通し

趙らのグループは城下町の景観構造について都市型景廊と庭園型景廊の2つに分類している(図12)。この分類にしたがえば飯田城下町は都市型景廊の山あて景廊に当てはまる。また、町割が縦町で移動方向と眺望方向が一致するので連続景廊でもある。

飯田の町割はほぼ近世の町割を踏襲しているため、現在の25000分の1地形図から街路を抽出することによって近世の都市骨格を復原することが可能である。都市骨格の復原後に城下町絵図の山並みを考慮して山への見通しを復原したのが図13である。この図からは城下町内の町屋



図14 大手通りからの可視領域

を通る主要な街路全てで山への見通しが並列的に確保されていることが指摘できる。

では具体的にどの山を対象として、どの程度の景観を城下町に取り込んでいたのかを大手門を起点として考えてみたい。作業としてはまず2500分の1地形図を基図として「飯田城絵図」を幾何補正することによって地形図上に「飯田城絵図」を復原した。補正した際のずれは約7.3mであった。そして10mメッシュ標高から等高線図を作成し、10mメッシュ標高を入力サーフェスとして可視領域分析をおこなった。この作業によって作成された大手通りからの可視領域を示したのが図14である。基本的に飯田の城下町は北部から南部にかけてゆるやかに下り、北部の山々にいたるまでには起伏もあるが、この図では起点となる大手門から北部の山々の多くが見渡せることが確認できる。さらに風水理論の四神相応で玄武にあたる風越山は虚空蔵山の後部に位置するが、その山頂は起点となる大手門から見通すことが可能である。風越山の霊峰としての信仰性を考えれば飯田城下町の山あて景観は風越山を対象としており、街路の基軸には景観構造も考えられていたといえる。

V. 城下町の町割と基軸の設定

これまでに城下町の基軸を風水理論と景観構造の面から考えてきた。次に城下町の町割を具体的に考察することによって城下町の町割手法・基軸と風水理論について考えたい。小城下町は微地形や風向きと応答した骨格やゾーニングなど様々な点を考慮し、特にモジュール²⁴⁾を用いた町割手法によって綿密にデザインされていたことが指摘される。

モジュールの起点は天守や高札場、大手門、街道の屈曲点など様々な地点が考えられる。飯田城下町におけるモジュールの起点を考えるため城下町内のいくつかの地点間の距離を計測すると、大手町通りの街道が屈曲する箇所(A)から本丸までが600m=330間となる。同様に大手から伝馬町の枡形と東北にある真光寺点間の距離も600mであった。また、大手通りの突き当たりを(B)点とすると箕瀬の枡形までは450m=247.5間、城下町の土塁の外側に位置する桜町の西端(C)点から東端までは450m=247.5間、本町の街区の長辺は150m=82.5間であった。これらの距離に共通するのは60m=33間の公倍数という点である。したがって飯田の城下町は大手町通りの街道屈曲点を城下町設計の起点とし、60m=33間を基準寸法とし、その起点は玄武と朱雀を結ぶ軸上にあつたと考えることができる。(図15)。

24) モジュールとは城下町の設計に繰り返し用いられる固有の寸法を指す。30~50間程度の値で都市ごとに異なる。町人地を通る街道の寸法、屈曲間の距離などは都市ごとのモジュールの整数倍で決定されることが多い。笠真希・武田光史・佐藤滋「小城下町における環境構成に関する研究—小城下町のデザイン手法の解説方法—」日本建築学会学術講演梗概集。F-1, 1996, 735-736頁。

最後に飯田城下町の都市計画と基軸の設定を簡潔にまとめたい。飯田城は室町時代に板西氏によって築かれ、幾度かの拡張によって大きくなっていったと考えられている。町割りの基礎を築いたのは16世紀末から17世紀初頭に飯田城主となった京極氏で、城下町の大幅な整備もこの時期におこなわれている。城下町の整備に京都の風水理論を模倣したとすれば、やはり玄武としての風越山と朱雀としての松川と野底川の合流地点を結ぶ軸を考慮して城下町の基軸を設定したと考えられる。その基軸にほぼ沿うように大手通が設定され、城下町設計の中心としていたこともそのためであろう。さらに、清水畑グループが比定したように白山神社を気の集まる「穴」として、その前面の城下町がある平野を「明堂」とすれば、飯田の城下町は風水理論の理想形態を目指したといえよう。

飯田城下町の設計手法からは、城下町の設計は単に実用的な面からだけでなく風水理論や周囲の景観を城下町に取り込む景観構造など、様々な考え方が考慮されていたことを確認できた。その中でも飯田は京都にならった都市計画を目指したため風水理論の考え方が大きな要素を占め、城下町の基軸の設定に影響していたといえる。

そもそも風水理論は自然環境を判断する方法なので、そこには長年培われてきた知恵が含まれる。したがって風水理論に基づく城下町の設計は自然を生かした都市計画ともいえる。しかし、風水理論に基づく都市計画を軽率に科学的であるとするのは安直でもある。あくまで都市計画の一面であることを踏まえて、今後はさらに調査対象とする城下町を増やして近世都市の基軸設定を考える必要があるだろう。

【付記】

本論の調査に当たっては関西大学地理学・地域環境学専修の鯉沼貴大、佐々木幸枝の協力を得た。ここに厚く御礼申し上げる。